

弟子

中島敦

青空文庫

魯ろの卞べんの游ゆう 俠きやうの徒と、仲ちゆう由ゆう、字あざなは子路しよという者が、近ちか
 頃ろ賢けん者の噂しやうも高うい学がく 匠しやう・陋すう人ひと 孔こう 丘きゆうを辱はずしめてくれ
 ようものと思おもうい立たつた。似え而せ非せ賢けん者な何なに程ほどのことやあらんと、蓬ほう
 頭う突とう鬢とつ・垂すい冠かん・短たん後こうの衣いといふ服いで装たちで、左ひだり手に雄おん雞どり、
 右みぎ手に牡おす豚ぶたを引ひ提たげ、勢いき猛まうに、孔こう丘きゆうが家いへを指さして出で掛かける。雞けい
 を揺ゆり豚ぶたを奮ふるい、嗽かまびす、脣しん吻ぶんの音ねをもつて、儒じゆ家かの絃げん歌か講かう
 誦うの声こゑを擾みだそつというのである。

けたたましい動物の叫さけびと共に眼めを瞋いからして跳とび込こんで来た青

年と、鬪冠句履緩く袂を帯びて几に凭った温顔の孔子との間に、問答が始まる。

「汝、何をか好む？」と孔子が聞く。

「我、長劍を好む。」と青年は昂然として言い放つ。

孔子は思わずニコリとした。青年の声や態度の中に、余りに稚氣満々たる誇負を見たからである。血色のいい・眉の太い・眼のはつきりした・見るからに精悍そうな青年の顔には、しかし、どこか、愛すべき素直さがおのずと現れているように思われる。再び孔子が聞く。

「学はすなわちいかん？」

「学、豈、益あらんや。」もともとこれを言うのが目的なのだか

ら、子路は勢込んで怒鳴る（どな）るように答える。

学の権威（けんい）について云々（うんぬん）されては微笑（わら）つてばかりもいられない。

孔子は諄々（じゆんじゆん）として学の必要を説き始める。人君（じんくん）にして諫（かんし）

臣（しん）が無ければ正（せい）を失い、士にして教友が無ければ聴（ちやう）を失う。樹（き）

も繩（なわ）を受けて始めて直くなるのではないか。馬に策（むち）が、弓に檠（けい）が

必要なように、人にも、その放恣（ほうし）な性情を矯（た）める教学が、どうし

て必要でなからうぞ。匡（ただ）し理（おさ）め磨（みが）いて、始めてものは有用の材と

なるのだ。

後世に残された語録の字面（じづら）などからは到底（とうてい）想像も出来ぬ・極

めて説得的な弁舌を孔子は有（も）っていた。言葉の内容ばかりでなく、

その穩（おだや）かな音声・抑揚（よくよう）の中にも、それを語る時の極めて確信に

充ちた態度の中にも、どうしても聴者を説得せずにはおかないものがある。青年の態度からは次第に反抗の色が消えて、ようやく謹聴の様子に変わって来る。

「しかし」と、それでも子路はなお逆襲する氣力を失わない。南山の竹は揉めずして自ら直く、斬つてこれを用うれば犀革の厚きをも通すと聞いている。して見れば、天性優れたる者にとつて、何の学ぶ必要があるうか？

孔子にとって、こんな幼稚な譬喩を打破るほどたやすい事はない。汝の云うその南山の竹に矢の羽をつけ鏃を付けてこれを礪いたならば、ただに犀革を通すのみではあるまいに、と孔子に言われた時、愛すべき単純な若者は返す言葉に窮した。顔を赧らめ、

しばらく孔子の前に突立つったたまま何か考えている様子だったが、急に雞と豚とを抛ほうり出し、頭を低たれて、「謹つづしんで教を受けん。」と降参した。単に言葉に窮したためではない。実は、室に入つて孔子の容を見、その最初の一言を聞いた時、直ちに雞豚けいとんの場違ばちがいであることを感じ、己おのれと余りにも懸絶けんぜつした相手の大きさに圧あ倒つとうされていたのである。

即日そくじつ、子路は師弟の礼を執とつて孔子の門に入った。

二

このような人間を、子路は見たことがない。力千鈞せんきんの鼎かなえを挙

げる勇者を彼は見たことがある。明千里の外を察する智者の話も聞いたことがある。しかし、孔子に在るものは、決してそんな怪物めいた異常さではない。ただ最も常識的な完成に過ぎないのである。知情意のおのおのから肉体的の諸能力に至るまで、実に平凡に、しかし実に伸び伸びと発達した見事さである。一つ一つの能力の優秀さが全然目立たないほど、過不及無く均衡のとれた豊かさは、子路にとって正しく初めて見る所のものであった。闊達自在、いささかの道学者臭も無いのに子路は驚く。この人は苦勞人だなどすぐに子路は感じた。可笑しいことに、子路の誇る武芸や膂力においてさえ孔子の方が上なのである。ただそれを平生用いないだけのことだ。俠者子路はまずこの点

で度胆どぎもを抜ぬかれた。放蕩無頼ほうとうぶらいの生活にも経験があるのではない
 かと思われる位、あらゆる人間への鋭すい心理的洞察どうさつがある。そ
 ういう一面から、また一方、極めて高く汚けれないその理想主義に
 至るまでの幅はばの広さを考えると、子路はウーンと心の底から呻うなら
 ずにはいられない。とにかく、この人はどこへ持つて行つても大
 丈夫な人だ。潔癖けつぺきな倫理的りんりてきな見方からしても大丈夫だいじょうぶだし、
 最も世俗的な意味から云いつても大丈夫だ。子路が今までに会つた
 人間の偉えらさは、どれも皆みなその利用価値の中に在つた。これこれの
 役に立つから偉いというに過ぎない。孔子の場合は全然違ちがう。た
 だそこに孔子という人間が存在するといふだけで充じゆう分ぶんなのだ。
 少くとも子路には、そう思えた。彼はすっかり心醉しんすいしてしまつ

た。門に入つていまだ一月ならずして、もはや、この精神的支柱から離れ得ない自分を感じていた。

後年の孔子の長い放浪の艱苦を通じて、子路ほど欣然とし

て従つた者は無い。それは、孔子の弟子たることによつて仕官の途を求めようとするのでもなく、また、滑稽なことに、師の傍

に在つて己の才徳を磨こうとするのでさえもなかつた。死に至るまで渝らなかつた・極端に求むる所の無い・純粋な敬愛

の情だけが、この男を師の傍に引留めたのである。かつて長剣を手離せなかつたように、子路は今は何としてもこの人から離れられなくなつていた。

その時、四十而不惑といつた・その四十歳に孔子はまだ

達していなかった。子路よりわずか九歳の年長に過ぎないのだが、子路はその年齢ねんれいの差をほとんど無限の距離きよりに感じていた。

孔子は孔子で、この弟子の際立つた馴ならし難さに驚いている。単に勇を好むとか柔じゆうを嫌きらうとかいいうならば幾いくらでも類はあるが、この弟子ほどももの形を軽けい蔑べつする男も珍めづらしい。究極は精神に帰すると云いじよう、礼なるものはすべて形から入らねばならぬのに、子路という男は、その形からはいつて行くという筋道を容易に受けつけないのである。「礼と云い礼と云う。玉ぎよく 帛はくを云わんや。楽がくと云い楽と云う。鐘しょう 鼓こを云わんや。」などと云うと大いに欣よろこんで聞いているが、曲きよく 礼れいの細則を説く段になるとにわ

かに詰つまらなさをうな顔をする。形式主義への・この本能的忌避きひと闘たたかつてこの男に礼樂を教えるのは、孔子にとつてもなかなかの難事であつた。が、それ以上に、これを習うことが子路にとつての難事業であつた。子路が頼たよるのは孔子という人間の厚みだけである。その厚みが、日常の区々たる細行の集積であるとは、子路には考えられない。本もとがあつて始めて末が生ずるのだと彼は言う。しかしその本もとをいかにして養うかについての實際的な考こうりよ慮りよが足りないとして、いつも孔子に叱しかられるのである。彼が孔子に心服するのは一つのこと。彼が孔子の感化を直ちに受けつけたかどうかは、また別の事に属する。

上智と下愚かぐは移り難いと言つた時、孔子は子路のことを考えに

入れていなかった。欠点だらけではあつても、子路を下愚とは孔子も考えない。孔子はこの剽悍ひょうかんな弟子の無類の美点を誰だれよりも高く買つている。それはこの男の純粋な没利害性のことだ。この種の美しさは、この国の人々の間に在つては余りにも稀まれなので、子路のこの傾向けいこうは、孔子以外の誰からも徳としては認められない。むしろ一種の不可解な愚かさおろとして映るに過ぎないのである。しかし、子路の勇も政治的才幹も、この珍しい愚かさに比べれば、ものの数でないことを、孔子だけは良く知っていた。

師の言に従つて己おのれを抑えおさ、とにもかくにも形に就こうとしたのは、親に対する態度においてであつた。孔子の門に入つて以来、

乱暴者の子路が急に親孝行になったという親戚しんせき中の評判である。
 褒ほめられて子路は変な気がした。親孝行どころか、嘘うそばかりついでいるような気がして仕方が無いからである。我儘わがままを云って親を手古摺てこずらせていた頃ころの方が、どう考えても正直だったのだ。今の自分の偽いつわりに喜ばされている親達おやぢが少々情無くも思われる。こまかい心理分析家ぶんせきかではないけれども、極めて正直な人間だったので、こんな事にも気が付くのである。ずっと後年になって、ある時突とつぜん然、親の老いたことに気が付き、己の幼かった頃の両親の元気な姿を思出したら、急に涙なみだが出て来た。その時以来、子路の親孝行は無類けんしんてきの献身的なものとなるのだが、とにかく、それまでの彼の俄にわか孝行はこんな工合ぐあいであった。

ある日子路が街を歩いて行くと、かつての友人の二三に出会った。無頼とは云えぬまでも放縦ほうじゆうにして拘こわだる所の無い游侠の徒である。子路は立止ってしばらく話した。その中うちに彼等らの一人が子路の服装ふくそうをじろじろ見廻みまわし、やあ、これが儒服という奴やつか？

随ずい分ぶんみすぼらしいなりだな、と言った。長劍ちやうけんが恋こいしくはないかい、とも言った。子路が相手にしないでいると、今度は聞捨ききずてのならぬことを言出した。どうだい。あの孔丘という先生はなかなかの喰くわせものだって云うじゃないか。しかつめらしい顔をし

て心にもない事を誠しやかに説いていると、えらく甘い汁あまが吸えるものと見えるなあ。別に悪意がある訳ではなく、心安立こころやすだてからのいつもの毒舌だったが、子路は顔色を変えた。いきなりその男の胸むな倉ぐらを掴つかみ、右手の拳こぶしをしたたか横よこ面つらに飛ばした。二つ三つ続け様に喰くらわしてから手を離すと、相手は意気地なく倒たおれた。呆あっけ気けに取られている他の連中に向つても子路は挑ちよう戦せん的てきな眼まなこを向けたが、子路の剛ごう勇ゆうを知る彼等は向つて来ようともしない。殴なぐられた男を左右から扶たすけ起し、捨すて台ぜりふ詞ふ一つ残さずにこそそと立去つた。

いつかこの事が孔子の耳に入ったものと見える。子路が呼ばれ

て師の前に出て行つた時、直接には触れないながら、次のようなことを聞かされねばならなかつた。古の君子は忠をもつて質となし仁をもつて衛となした。不善ある時はすなわち忠をもつてこれを化し、侵暴ある時はすなわち仁をもつてこれを固うした。腕力みりよくの必要を見ぬゆえんである。とかく小人は不遜をもつて勇と見做し勝ちだが、君子の勇とは義を立つることの謂である云々。神妙に子路は聞いていた。

数日後、子路がまた街を歩いていると、往来の木蔭で閑人達の盛んに弁じている声が耳に入った。それがどうやら孔子の噂のようである。——昔、昔、と何でも古を担ぎ出して今を貶す。誰

も昔を見たことがないのだから何とでも言える訳さ。しかし昔の道をしやくしじようぎ子定規にそのまま履ふんで、それで巧うまく世が治まるくらいなら、誰も苦勞はしないよ。俺達おれにとっては、死んだ周公よりも生ける陽虎様ようこさまの方が偉いということになるのさ。

げこくじよう下剋上の世であつた。政治の実権が魯侯ろこうからその大夫たる季孫氏そんしの手に移り、それが今や更さらに季孫氏の臣たる陽虎という野心家の手に移ろうとしている。しやべっている当人はあるいは陽虎の身内の者かも知れない。

——ところで、その陽虎様がこの間から孔丘を用いようと何度も迎むかえを出されたのに、何と、孔丘の方からそれを避さけているというじゃないか。口では大層な事を言っている、実際の生きた

政治にはまるで自信が無いのだろうよ。あの手合てあいはね。

子路は背後うしろから人々を分けて、つかつかと弁者の前に進み出た。人々は彼が孔門の徒であることをすぐに認めた。今まで得々と弁じ立てていた当の老人は、顔色を失い、意味も無く子路の前に頭を下げてから人垣ひとがきの背後に身を隠かくした。皆みなを決ました子路の形ぎよう相そうが余りにすさまじかつたのであろう。

その後しばらく、同じような事が処々で起つた。肩かたを怒いからせ炯けい々いけいと眼を光らせた子路の姿が遠くから見え出すと、人々は孔子を刺そしる口を噤つぶむようになった。

子路はこの事で度々師に叱られるが、自分でもどうしようもな

い。彼は彼なりに心の中では言分いぶんが無いでもない。いわゆる君子なるものが俺と同じ強さの忿怒ふんぬを感じてなおかつそれを抑え得るのだったら、そりや偉い。しかし、実際は、俺ほど強く怒りを感じやしないんだ。少くとも、抑え得る程度に弱くしか感じていないのだ。きつと……………。

一年ほど経たってから孔子が苦笑と共に嘆たんじた。由ゆうが門に入ってから自分は悪言を耳にしなくなつたと。

四

ある時、子路が一室で瑟しつを鼓こしていた。

孔子はそれを別室で聞いていたが、しばらくして傍かたわらなる冉ぜんゆ

有うに向つて言った。あの瑟の音を聞くがよい。暴厲ぼうれいの気がお

のずから漲みなぎっているではないか。君子の音は温おんじゆう柔じゆうにして中ちゆうに

おり、生育の気を養うものでなければならぬ。昔舜しゆんは五絃ごげん琴を

弾だんじて南風の詩を作った。南風の薰くんずるやもつて我が民の慍いかりを解

くべし。南風の時なるやもつて我が民の財おおいを阜おおいにすべしと。今由ゆう

の音を聞くに、誠に殺伐さつぱつげきえつ激越げきえつ、南音なんおんに非あらずして北声ほくせいに類する

ものだ。弾者の荒怠こうたい暴恣ぼうしの心状こころざしをこれほど明らかに映し出した

ものはない。――

後、冉有が子路の所へ行つて夫子ふうしの言葉を告げた。

子路は元々自分に楽才の乏しいことを知っている。そして自らそれを耳と手のせいに帰していた。しかし、それが実はもつと深い精神の持ち方から来ているのだと聞かされた時、彼は愕然として懼れた。大切なのは手の習練ではない。もつと深く考えねばならぬ。彼は一室に閉じ籠り、静思して喰わず、もつて骨立するに至った。数日の後、ようやく思い得たと信じて、再び瑟を執った。そうして、極めて恐る恐る弾じた。その音を洩れ聞いた孔子は、今度は別に何も言わなかった。咎めるような顔色も見えない。子貢が子路の所へ行つてそのむねを告げた。師の咎が無かつたと聞いて子路は嬉しげに笑った。

人の良い兄弟子の嬉しそうな笑顔を見て、若い子貢も微笑を禁

じ得ない。聡明そうめいな子貢はちゃんと知っている。子路の奏かなでる音が依然いぜんとして殺伐な北声に満ちていることを。そうして、夫子がそれを咎めたまわぬのは、瘦やせ細るまで苦しんで考え込んだ子路の一本気をあわれ慥ままれたために過ぎないことを。

五

弟子の中で、子路ほど孔子に叱られる者は無い。子路ほど遠えんり慮よなく師に反問する者もない。「請こう。古の道をす釈すてて由ゆうの意を行わん。可ならんか。」などと、叱られるに決っていることを聞いてみたり、孔子に面と向ってずけずけと「これある哉かな。子の

迂うなるや！」などと云つてのける人間は他に誰もいない。それでいて、また、子路ほど全身的に孔子に凭より掛かつている者もないのである。どしどし問返すのは、心から納な得とく出来ないものを表う面わだけ諾うべなことの出来ぬ性分だからだ。また、他の弟子達のように、啜わられまい叱ちられまいと氣を遣つかないからである。

子路が他の所ではあくまで人の下風に立つを潔しとしない独立不ふ羈きの男であり、一いち諾だく千せん金きんの快男児であるだけに、碌ろ々ろたる凡ぼん弟子ていし然ぜんとして孔子の前に侍はんつている姿は、人々に確きかに奇き異いな感じを与あたえた。事実、彼には、孔子の前にいる時だけは複雑な思索しや重要じな判断はんは一い切っ師しに任ませてしまつて自分は安心あんしきつてゐるような滑こ稽けいな傾向けいも無いではない。母親の前では自分

に出来る事までも、してもらっている幼児と同じような工合である。退いて考えてみて、自ら苦笑することがある位だ。

だが、これほどの師にもなお触れることを許さぬ胸中の奥所がある。ここばかりは譲れ^{ゆず}ないというぎりぎり結著の所が。

すなわち、子路にとつて、この世に一つの大事なものがある。

そのものの前には死生も論ずるに足りず、いわんや、区々たる利害のごとき、問題にはならない。侠といえばやや軽すぎる。信と
いい義という^うと、どうも道学者流で自由な躍^{やく}動^{どう}の氣に欠ける憾^{うら}
みがある。そんな名前はどうでもいい。子路にとつて、それは快
感の一種のようなものである。とにかく、その感じられるもの

が善きことであり、その伴ともなわないものが悪あしきことだ。極めてはつきりしていて、いまだかつてこれに疑を感じたことがない。

孔子の云う仁とはかなり開きがあるのだが、子路は師の教の中から、この単純な倫理観を補強するようなものばかりを選んで撮とり入れる。巧コウゲン言レイシ令シ色ヨクス足ウキ恭ヨウ、怨ウラミヲ匿カクシテ其ソノ人ヲ友トスルハ、

丘コレ之ハヲ恥ハヅとか、生ヲ求メテ以モツテ仁ヲ害スルナク身ヲ殺シテ以

テ仁ヲ成スアリとか、狂者ハ進ンデ取り狷ケンジャ者ハ為ナサザル所ア

リとかいふのが、それだ。孔子も初めはこの角つのを矯ためようとしてないではなかったが、後には諦あきらめて止やめてしまった。とにかく、

これはこれで一匹びきの見事な牛には違ちがひないのだから。策むちを必要とする弟子もあれば、手綱たづなを必要とする弟子もある。容易な手綱で

は抑えられそうもない子路の性格的欠点が、実は同時にかえつて
 大いに用うるに足るものであることを知り、子路には大体の方向
 の指示さえ与えればよいのだと考えていた。敬ニシテ礼ニ中ラザ
 ルヲ野トイヒ、勇ニシテ礼ニ中ラザルヲ逆トイフとか、信ヲ好
 ンデ学ヲ好マザレバソノ蔽ヘイヤ賊ソク、直ヲ好ンデ学ヲ好マザレバソノ
 蔽カウヤ絞カウ などというのも、結局は、個人としての子路に対してよ
 りも、いわば塾頭格じゆくとうかくとしての子路に向つての叱言こごことである場合
 が多かった。子路という特殊な個人に在つてはかえつて魅みりよく力と
 なり得るものが、他の門生一いっばん般ばんについてはおおむね害となるこ
 とが多いからである。

六

晋しんの魏き榆ゆうの地で石がものを言つたという。民の怨えん嗟さの聲が石を
仮かりて発したたのであろうと、ある賢者が解した。既すでに衰すい微びした周
室は更に二つに分れて争つてゐる。十に余る大国はそれぞれ相結
び相闘つて干かん戈かの止む時が無い。齊せい侯こうの一人は臣下の妻に通じ
て夜ごとその邸やしきに忍しのんで来る中ちゆうについてその夫ふうに弑しいせられてしま
う。楚そでは王族の一人が病びよう臥が中の王の頸くびをしめて位うゑを奪うう。呉ご
では足頸きりを斬きり取とられた罪人共が王を襲おそい、晋では二人の臣たがが互たが
に妻を交こう換かんし合う。このような世の中であつた。

魯の昭公は上じょう卿けい季平子きへいしを討とうとしてかえつて国を逐おわれ、

亡命七年にして他国で窮死する。亡命中帰国の話がとどのい
 かつて、昭公に従った臣下共が帰国後の己の運命を案じ公を引
 留めて帰らせない。魯の国は季孫・叔孫・孟孫三氏の天下
 から、更に季氏の宰・陽虎の恣な手に操られて行く。

ところが、その策士陽虎が結局己の策に倒れて失脚してか

ら、急にこの国の政界の風向きが変った。思いがけなく孔子が中

都の宰として用いられることになる。公平無私な官吏や苛斂

誅求を事とせぬ政治家の皆無だった当時のこととて、孔子の公

正な方針と周到な計画とはごく短い期間に驚異的な治績を挙げ

た。すつかり驚嘆した主君の定公が問うた。汝の中都を治め

し所の法をもつて魯国を治むればすなわちいかん？ 孔子が答え

て言う。何ぞ但魯国のみならんや。天下を治むるといへども可ならんか。およそ法螺とは縁の遠い孔子がすこぶる恭しい調子で澄ましてこうした壮語を弄したので、定公はますます驚いた。彼は直ちに孔子を司空に挙げ、続いて大司寇に進めて宰相の事をも兼ね撰らせた。孔子の推挙で子路は魯国の内閣書記官長とも言うべき季氏の宰となる。孔子の内政改革案の実行者として真先に活動したことは言うまでもない。

孔子の政策の第一は中央集権すなわち魯侯の権力強化である。このためには、現在魯侯よりも勢力を有つ季・叔・孟・三桓の力を削がねばならぬ。三氏の私城にして百雉（厚さ三丈、高さ一丈）を超えるものに、費・成の三地がある。まずこれ等を毀つ

ことに孔子は決め、その実行に直接当たったのが子路であった。

自分の仕事の結果がすぐにはつきりと現れて来る、しかも今までの経験には無かったほどの大きい規模で現れて来ることは、子路のような人間にとって確かに愉快に違いなかった。殊に、既成政治家の張り廻らした奸悪な組織や習慣を一つ一つ破碎して行くことは、子路に、今まで知らなかった一種の生甲斐を感じさせる。多年の抱負の実現に生々と忙しげな孔子の顔を見るのも、さすがに嬉しい。孔子の目にも、弟子の一人としてではなく、一個の実行力ある政治家としての子路の姿が頼もしいものに映った。

費の城を毀しに掛かった時、それに反抗して公山不狃という者が費人を率い魯の都を襲うた。武子台に難を避けた定公の身

辺にまで叛軍はんぐんの矢が及ぶほど、一時は危かったが、孔子の適切な判断と指揮とによつて纔わずかに事無きを得た。子路はまた改めて師の實際的じゆわん手腕しゆわんに敬服する。孔子の政治家としての手腕は良く知っているし、またその個人的な膂力の強さも知つてはいたが、実際の戦闘に際してこれほどの鮮あややかな指揮ぶりを見せようとは思いがけなかつたのである。もちろん、子路自身もこの時は真先に立つて奮い戦つた。久しぶりに揮ふるう長劍の味も、まんざら棄すたものではない。とにかく、経書の字句をほじくつたり古礼を習うたりするよりも、粗あらい現実の面と取組み合つて生きて行く方が、この男の性に合っているようである。

齊との間の屈辱的媾和のために、定公が孔子を随したがえて齊の
 景公と夾きょう谷こくの地に会したことがある。その時孔子は齊の無礼
 を咎とがめて、景公始め群卿諸大夫を頭かぶごなしに叱咤しったした。戦勝国た
 るはずの齊の君臣一同ことごとく顛かぶえ上ったとある。子路をして
 心からの快哉かいさいを叫こゑばしめるに充分な出来事ではあつたが、この
 時以来、強国齊は、隣りん国こくの宰相としての孔子の存在に、あるい
 は孔子の施政しせいの下もとに充実して行く魯の国力に、懼おそれを抱いだき始めた。
 苦心の結果、誠にいかにも古代支那しな式な苦肉の策が採られた。す
 なわち、齊から魯へ贈おくるに、歌舞かぶに長じた美女の一団をもつてし
 たのである。こうして魯侯の心を蕩とろかし定公と孔子との間を離間りかん
 しようとしたのだ。ところで、更に古代支那式なのは、この幼稚

な策が、魯国内反孔子派の策動と相俟あいまつて、余りにも速く効を奏したことである。魯侯は女樂ちやうに耽ふけつてもはや朝に出なくなつた。季桓子きかんし以下の大官連もこれに倣ならい出す。子路は真先に憤慨ふんがいして衝しょうとつ突し、官を辞した。孔子は子路ほど早く見切をつけず、なお尽くせるだけの手段を尽くそうとする。子路は孔子に早く辞やめてもらいたくて仕方が無い。師が臣節けがを汚すのを懼れるのではなく、ただこの淫みだらな雰圍ふんいき氣の中に師を置いて眺ながめるのが堪たまらないのである。

孔子の粘ねばり強さもついに諦めねばならなくなつた時、子路はほつとした。そうして、師に従よろこつて欣んで魯の国を立退たちのいた。

作曲家でもあり作詞家でもあつた孔子は、次第とおざかに遠離とり行く

都城を顧みながら、歌う。

かの美婦の口には君子ももって出走すべし。かの美婦の謁には君子ももって死敗すべし。……………

かくて、爾後永年に亘る孔子の遍歴が始まる。

七

大きな疑問が一つある。子供の時からの疑問なのだが、成人になっても老人になりかかってもいまだに納得できないことに変りはない。それは、誰もが一向に怪しもうとしない事柄だ。邪が栄えて正が虐げられるという・ありきたりの事実についてである。

この事實にぶつかるごとに、子路は心からの悲憤ひぶんを発しないではいられない。なぜだ？ なぜそうなのだ？ 悪は一時榮えても結局はその酬むくいを受けると人は云う。なるほどそういう例もあるかも知れぬ。しかし、それも人間というものが結局は破滅はめつに終るという一般的な場合の一例なのではないか。善人が究極の勝利を得たなどという例ためしは、遠い昔は知らず、今の世ではほとんど聞いたことさえ無い。なぜだ？ なぜだ？ 大きな子供・子路にとつて、こればかりは幾ら憤慨しても憤慨し足りないのだ。彼は地団駄じだんだを踏むふ思いで、天とは何だと考える。天は何を見ているのだ。そのような運命を作り上げるのが天なら、自分は天に反抗はんこうしないではないられない。天は人間と獣けものとの間に区別を設けないと同じく、

善と悪との間にも差別を立てないのか。正とか邪とかは畢ひつきよう 竟 人間の間だけの仮の取決とりきめに過ぎないのか？ 子路がこの問題で孔子の所へ聞きに行くと、いつも決つて、人間の幸福というものの真の在り方について説き聞かせられるだけだ。善をなすことの報むくいは、では結局、善をなしたという満足の外には無いのか？ 師の前では一応納得したような気になるのだが、さて退いて独りになつて考えてみると、やはりどうしても釈然としない所が残る。そんな無理に解釈してみたあげくの幸福なんかでは承知出来ない。誰が見ても文句の無い・はつきりした形の善報が義人の上に来るのでなくては、どうしても面白くないのである。

天についてのこの不満を、彼は何よりも師の運命について感じ

る。ほとんど人間とは思えないこの大才、大徳が、なぜこうした不遇ふくうに甘んじなければならぬのか。家庭的にも恵めぐまれず、年老いてから放浪の旅に出なければならぬような不運が、どうしてこの人を待たねばならぬのか。一夜、「鳳ほうちよう鳥と至らず。河、凶とを出さず。已やんぬるかな。」と独言に孔子が眩つばやくのを聞いた時、子路は思わず涙なみだの溢あふれて来るのを禁じ得なかつた。孔子が嘆じたのは天下蒼生そうせいのためだったが、子路の泣いたのは天下のためではなく孔子一人のためである。

この人と、この人をま躓まつ時世とを見て泣いた時から、子路の心は決っている。濁世だくせのあるゆる侵しんがい害がいからこの人を守るたて楯たてとなること。精神的には尊かれ守られる代りに、世俗的な煩はんろう勞ろう汚おじよく辱じよく。

を一切己おのが身に引受けること。僭せん越えつながらこれが自分の務つとめだと思ふ。学も才も自分は後学の諸才人に劣おとるかも知れぬ。しかし、いったん事ある場合真先に夫子のために生命を抛なげうつて顧みぬのは誰よりも自分だと、彼は自ら深く信じていた。

八

「ここに美玉あり。匱ひつに韞おきめて蔵かくさんか。善賈ぜんかを求めて沽うらんか。」と子貢が言った時、孔子は即座そくざに、「これを沽うらんか哉かな。これを沽うらん哉かな。我は賈あたいを待つものなり。」と答えた。

そういうつもりで孔子は天下周遊の旅に出たのである。随った

弟子達も大部分はもちろん沽りたいのだが、子路は必ずしも沽ろうとは思わない。権力の地位に在つて所信を断行する快さは既に先頃の経験で知つてはいるが、それには孔子を上いたに戴ただくといった風な特別な条件が絶対に必要である。それが出来ないなら、むしろ、「褐かつ（粗衣そい）を被きて玉たまを懐いだく」という生き方が好ましい。生しようがい
涯がい 孔子の番犬に終わろうとも、いささかの悔くも無い。世俗的な
虚きよ栄えい心しんが無い訳ではないが、なまじいの仕官はかえつて己おのれの本
領りやうたる磊らい落らく闊くわん達を害するものだと思つてゐる。

様々な連中が孔子に従つて歩いた。てきぱきした実務家の冉ぜん有う。温厚の長者閔びん子騫しけん。穿せん鑿さく好きな故実家の子夏しか。いささ

か詭弁派きべんはてき的な享受きやうじゆ家宰かさい予よ。氣骨稜々きこつりようりようたる慷慨家こうがいの公良こうりよ
うじゆ孺にゆ。身長九尺六寸といわれる長人孔子の半分位たんのわしかない短たんなわ
い矮ぐちよくしやしこうな愚直者子羔。年ねん齡れいから云つても貫祿かんろくから云つても、も
ちろん子路が彼等のさいりようかく宰領格さいりようかくである。

子路より二十二歳も年下ではあつたが、子貢という青年は誠に
際立つた才人である。孔子がいつも口を極めて賞ほめる顔がんかい回かいより
も、むしろ子貢の方を子路は推したい氣持であつた。孔子からそ
の強きやうじん韌じんな生活力と、またその政治性とを抜き去つたような顔
回かいという若者を、子路は余り好まない。それは決して嫉妬しつとではな
い。(子貢しこう子張しちやう輩はいは、顔淵がんえんに対する・師しの桁外けたはずれの打込み
方に、どうしてもこの感情を禁じ得ないらしいが。) 子路は年齢

が違い過ぎてもいるし、それに元来そんな事に拘こわらぬ性たちでもあ
 ったから。ただ、彼には顔淵の受動的な柔じゆうなん軟な才能の良さが
 全然呑のみ込めないのである。第一、どこかヴァイタルな力の欠け
 ている所が氣に入らない。そこへ行くと、多少軽けい薄はくではあつて
 も常に才氣と活力とに充ちている子貢の方が、子路の性質には合
 うのであろう。この若者の頭の鋭さに驚かされるのは子路ばかり
 ではない。頭に比べてまだ人間の出来ていないことは誰にも氣付
 かれる所だが、しかし、それは年齢というものだ。余りの軽薄さ
 に腹を立てて一いっかつ喝を喰くわせることもあるが、大体において、後
 世おそ畏るべしという感じを子路はこの青年に対して抱かかっている。

ある時、子貢が二三の朋ほうばい輩ばいに向つて次のような意味のことを

述べた。——夫子は巧弁を忌むといわれるが、しかし夫子自身弁が巧過ぎると思う。これは警戒を要する。宰予などの巧さとは、まるで違う。宰予の弁のごときは、巧さが目に立ち過ぎる故、聴者に楽しみは与え得ても、信頼は与え得ない。それだけにかえつて安全といえる。夫子のは全く違う。流暢さの代りに、絶対に人に疑を抱かせぬ重厚さを備え、諧謔の代りに、含蓄に富む譬喩を有つその弁は、何人といえども逆らうことの出来ぬものだ。もちろん、夫子の云われる所は九分九厘まで常に謬り無き真理だと思ふ。また夫子の行われる所は九分九厘まで我々の誰もが取つてもつて範とすべきものだ。にもかかわらず、残りの一厘——絶対に人に信頼を起させる夫子の弁舌の中の・わずか百

分の一が、時に、夫子の性格の（その性格の中の・絶対普遍的な真理と必ずしも一致しない極少部分の）弁明に用いられる惧れがある。警戒を要するのはここだ。これはあるいは、余り夫子に親しみ過ぎ狎れ過ぎたための慾の云わせることかも知れぬ。実際、後世の者が夫子をもつて聖人と崇めた所で、それは当然過ぎる位、当然なことだ。夫子ほど完全に近い人を自分は見たことがないし、また将来もこういう人はそう現れるものではなからうから。ただ自分の言いたいのは、その夫子にしてなおかつかかる微小ではあるが・警戒すべき点を残すものだという事だ。顔回のような夫子と似通った肌合の男にとっては、自分の感じるような不満は少しも感じられないに違いない。夫子がしばしば顔回を讃められる

のも、結局はこの肌合のせいではないのか。………

青あおにさい二才いの分際で師の批評などおこがましいと腹が立ち、また、

これを言わせているのは畢ひつきよう竟い顔淵への嫉妬だとは知りながら、

それでも子路はこの言葉の中に莫ぼ迦かにしきれないものを感じた。

肌合の相違ということについては、確かに子路も思い当ることがあつたからである。

おれ達には漠ぼくぜん然ぜんとしか気付かれないものをハツキリ形に表す

・妙みような才能が、この生意気な若わかぞう僧そうにはあるらしいと、子路は感

心と軽蔑とを同時に感じる。

子貢が孔子に奇妙な質問をしたことがある。「死者は知ること

ありや？ 將^はた知ることなきや？」死後の知覚の有無、あるいは
靈^{れい}魂^{こん}の滅不滅についての疑問である。孔子がまた妙な返辞をし
た。「死者知るありと言わんとすれば、まさに孝子順孫、生^{さまた}を妨
げてもつて死を送らんとすることを恐る。死者知るなしと言わん
とすれば、まさに不孝の子その親を棄^すてて葬^{ほうむ}らざらんとすること
を恐る。」およそ見当違いの返辞なので子貢は甚^{はなは}だ不服だった。
もちろん、子貢の質問の意味は良く判^{わか}っているが、あくまで現実
主義者、日常生活中心主義者たる孔子は、この優れた弟子の関心
の方向を換^かえようとしたのである。

子貢は不満だったので、子路にこの話をした。子路は別にそん
な問題に興味は無かったが、死そのものよりも師の死生観を知り

たい気がちよつとしたので、ある時死について訊たずねてみた。

「いまだ生を知らず。いづくんぞ死を知らん。」これが孔子の答であつた。

全くだ！ と子路はすっかり感心した。しかし、子貢はまたしても鮮あざやかに肩透かたすかしを喰つたような気がした。それはそうです。しかし私の言っているのはそんな事ではない。明らかにそう言っている子貢の表情である。

九

衛えいの靈公は極めて意志の弱い君主である。賢と不才とを識別し

得ないほど愚かではないのだが、結局は苦い諫言よりも甘い諂諛に欣ばされてしまう。衛の国政を左右するものはその後宮であつた。

夫人南子はつとに淫奔の噂が高い。まだ宋の公女だつた頃異母兄の朝という有名な美男と通じていたが、衛侯の夫人となつてからもなお宋朝を衛に呼び大夫に任じてこれと醜関係を続けていく。すこぶる才走つた女で、政治向の事にまで容喙するが、霊公はこの夫人の言葉なら頷かぬことはない。霊公に聴かれようとする者はまず南子に取入るのが例であつた。

孔子が魯から衛に入った時、召を受けて霊公には謁したが、夫人の所へは別に挨拶に出なかつた。南子が冠を曲げた。早速

人を遣わして孔子に言わしめる。四方の君子、寡君と兄弟たらんと欲する者は、必ず寡小君（夫人）を見る。寡小君見んことを願えり云々。

孔子もやむをえず挨拶に出た。南子は絺帷（薄い葛布の垂れぎぬ）の後に在つて孔子を引見する。孔子の北面稽首の礼に對し、南子が再拜して応えりと、夫人の身に着けた環珮が璆然として鳴つたとある。

孔子が公宮から歸つて来ると、子路が露骨に不愉快な顔をしていた。彼は、孔子が南子風情の要求などは黙殺することを望んでいたのである。まさか孔子が妖婦にたぶらかされるとは思はない。しかし、絶対清浄であるはずの夫子が汚らわしい淫

女に頭を下げたというだけで既に面白くない。美玉を愛蔵する者がその珠たまの表面おもてに不浄なるものの影かげの映るのさえ避けたい類たぐいなのであろう。孔子はまた、子路の中で相当敏腕びんわんな實際家と隣り合となつて住んでいる大きな子供が、いつまでたつても一向老成しそうもないのを見て、可笑おかしくもあり、困りもするのである。

一日、靈公の所から孔子へ使が来た。車で一いっしょ緒しよに都いちじゆを出掛けた。巡んしながら色々話うけたまわを承ろうと云う。孔子は欣んで服を改め直ちに出掛けた。

この丈たけの高いぶつきらぼうな爺じいさんを、靈公が無闇むやみに賢者として尊敬するのが、南子には面白くない。自分を出し抜いて、二人

同車して都を巡るなどとはもつての外である。

孔子が公に謁し、さて表に出て共に車に乗ろうとすると、そこには既に盛装を凝らした南子夫人が乗込んでいた。孔子の席が無い。南子は意地の悪い微笑を含んで靈公を見る。孔子もさすがに不愉快になり、冷やかに公の様子を窺う。靈公は面目無げに目を俯せ、しかし南子には何事も言えない。黙つて孔子のために次の車を指さす。

二乗の車が衛の都を行く。前なる四輪の豪華な馬車には、靈公と並んで嬋妍たる南子夫人の姿が牡丹の花のように輝く。後に見すばらしい二輪の牛車には、寂しげな孔子の顔が端然と正面を向いている。沿道の民衆の間にはさすがに秘やかな嘆声と

聾ひんしゆく 蹙しゆく とが起る。

群集の間に交つて子路もこの様子を見た。公からの使を受けた時の夫子の欣びを目にしているだけに、腸はらわたの煮え返る思いがするのだ。何事か嬌きようせい 声を弄ろうしながら南子が目の前を進んで行く。思わず嚇かつとなつて、彼は拳を固め人々を押分けて飛出そうとする。背後うしろから引留める者がある。振切ふりきろうと眼を瞋いからせて後を向く。子若しじやくと子正しせいの二人である。必死に子路の袖そでを控ひかえている二人の眼に、涙の宿っているのを子路は見た。子路は、ようやく振上げた拳を下す。

翌日、孔子等の一行は衛を去つた。「我いまだ徳を好むこと色

を好むがごとき者を見ざるなり。」というのが、その時の孔子の嘆声である。

十

葉しやうこう 公しこう 子高りゆうは竜を好むこと甚だしい。居室にも竜を彫ほり 繡しゅう帳ちやうにも竜を画き、日常竜の中に起き臥がしていた。これを聞いたほん物ものの天竜が大きに欣んで一日葉公の家に降くだり己おのれの愛好者を覗のぞき見た。頭は牖まどに窺かがい尾おは堂ひに くとひいう素晴らしい大きさである。葉公はこれを見るや怖おそれわななおそいて逃にげ走った。その魂こん魄ぱくを失い五色主無ごしきしゆなし、という意気地無きであつた。

諸侯は孔子の賢の名を好んで、その実を欣ばぬ。いずれも葉公の竜における類である。実際の孔子は余りに彼等には大き過ぎるもののように見えた。孔子を国賓こくひんとして遇ぐうしようという国はある。孔子の弟子の幾人いくにんかを用いた国もある。が、孔子の政策を実行しようとする国はどこにも無い。匡きやうでは暴民の凌辱りやうじよくを受けようとし、宋では姦臣かんしんの迫害はくがいに遭あい、蒲ほではまた兇漢きやうかんの襲撃しゆうげきを受ける。諸侯の敬遠と御用学者の嫉視と政治家連の排斥はいせきとが、孔子を待ち受けていたものすべてである。

それでもなお、講誦を止めず切磋せつさを怠おこたらず、孔子と弟子達とは倦まずに国々への旅を続けた。「鳥よく木を択えらぶ。木豈あに鳥を択えらばんや。」などと至つて気位は高いが、決して世を拗すねたのでは

なく、あくまで用いられんことを求めている。そして、己等おのれらの用いられようとするのは己がために非ずして天下のため、道のためなのだ和本気で——全く呆あきれたことに本気でそう考えている。乏しくとも常に明るく、苦しくとも望を捨てない。誠に不思議な一行であつた。

一行が招かれて楚その昭王もとの許へ行こうとした時、陳ちん・蔡さいの大夫共が相計り秘かに暴徒を集めて孔子等を途に囲おそませめた。孔子の楚に用いられることを懼おそれこれを妨げようとしたのである。暴徒に襲おちわれるのはこれが始めてではなかつたが、この時は最も困窮およに陥おちつた。糧りょう道どうが絶たれ、一同火食せざること七日に及およんだ。さすがに、餒うえ、疲つかれ、病者も続出する。弟子達の困憊こんぱいと恐きよう

惶こうとの間に在つて孔子は独り氣力少しも衰おとろえず、平生通り絃歌して輟やまない。従者等の疲憊ひはいを見るに見かねた子路が、いささか色を作なして、絃歌する孔子の側そばに行つた。そうして訊ねた。夫子の歌うは礼かと。孔子は答えない。絃を操る手も休めない。さて曲が終つてからようやく言つた。

「由ゆうよ。吾われ汝にに告げん。君子樂がくを好むは驕おごるなきがためなり。小人樂を好むは懾おそるるなきがためなり。それ誰だれの子ぞや。我を知らずして我に従う者は。」

子路は一瞬いつしゆん耳を疑つた。この窮境に在つてなお驕るなきがために樂をなすとや？ しかし、すぐにその心に思い到いたると、途と端たんに彼は嬉しくなり、覺えず戚ほこを執つて舞まうた。孔子がこれに和

して弾じ、曲、三度みたびめぐった。傍にある者またしばらくは飢うえを忘れ疲を忘れて、この武骨な即そつきよう興まいの舞に興じ入るのであった。

同じ陳蔡の厄やくの時、いまだ容易に囲みの解けそうもないのを見て、子路が言った。君子も窮することあるか？ と。師の平生の

説によれば、君子は窮することが無いはずだと思つたからである。

孔子が即座に答えた。「窮するとは道に窮するの謂いに非ずや。今、

丘きゆう、仁義の道を抱き乱世の患に遭う。何ぞ窮すとなさんや。もし

それ、食足らず体瘁つかるるをもつて窮すとなさば、君子ももとより

窮す。但ただ、小人は窮すればここに濫みだる。」と。そこが違うだけだ

というのである。子路は思わず顔を赧あからめた。己の内なる小人を

指摘された心地である。窮するも命なることを知り、大難に臨んでいささかの興奮の色も無い孔子の容を見ては、大勇なる哉と嘆ぜざるを得ない。かつての自分の誇であつた・白刃前に接わるも目まじろがざる底の勇が、何と惨めにちつぽけなことかと思ふのである。

十一

許きよから葉しやうへと出る途すがら、子路が独り孔子の一行に遅おくれて畑中の路みちを歩いて行くと、あじかを荷になうた一人の老人に会つた。子路が気軽に会えしやく釈して、夫子を見ざりしや、と問う。老人は立止つて、

「夫子夫子と言つたとて、どれが一体汝のいう夫子やら俺おれに分わかる訳がないではないか」と突堅つっけん貪どんに答え、子路の人態にんていをじろりと眺めてから、「見受けたところ、四体を勞せず實事に従わず空理空論に日を暮くらしている人らしいな。」と蔑さげすむように笑う。それから傍の畑に入りこちらを見返りもせずにつせと草を取り始めた。隱者いんじゃの一人に違いないと子路は思つて一揖いちゆうし、道に立つて次の言葉を待った。老人は黙つて一仕事してから道に出て来、子路を伴つて己が家に導いた。既に日が暮れかかつていたのである。老人は雞をつぶし黍きびを炊かしいで、もてなし、二人の子にも子路を引合せた。食後、いささかの濁酒にごりざけに酔よひの廻まわつた老人は傍なる琴を執つて弾じた。二人の子がそれに和して唱うたう。

湛タンタン々々タル露ツユアリ

陽ヒニ非ザレバ晞ヒズ

厭エンエン々々トシテ夜飲ス

酔ハズンバ歸ルコトナシ

明らかゆたかに貧ゆたしい生活くらなのにもかかわらず、まことに融ゆう々ゆうたる裕ゆたかさが家中あふに溢あふれている。和なごやかに充みち足りた親子三人の顔付ひらめの中に、時としてどこか知的なものが閃ひらめくのも、見逃みのがし難い。

弾はじじ終はつてから老人が子路に向つて語る。陸りくを行くには車、水みづを行くには舟ふねと昔むかしから決きつたもの。今陸りくを行くには舟ふねをもつてすれ

ば、いかん？ 今の世に周の古法を施ほどこそうとするのは、ちようど陸に舟やを行やるがごときものと謂いうべし。猿狙ざるに周公の服を着せれば、驚ひきさいて引裂ひきさき棄すてるに決きつてゐる。云々………子路を孔門の徒と知つての言葉であることは明らかだ。老人はまた言う。

「楽しみ全ぜんくして始めて志を得たといえる。志を得るとは軒冕けんべんの謂いではない。」と。澹然たんぜん無極むきよくとでもいうのがこの老人の理

想なのであろう。子路にとつてこうした遁世とんせい哲学てつがくは始めてではない。長沮ちようそ・桀溺けつてきの二人にも遇あつた。楚その接与せつよという佯ようき

狂きやうの男にも遇あつたことがある。しかしこうして彼等の生活の中に入り一夜を共に過あしたことは、まだ無なかつた。穏やかな老人の言葉と怡い々いたるその容ように接あしている中に、子路は、これもまた一

つの美しき生き方には違いないと、幾分の羨望せんぼうをさえ感じないではなかつた。

しかし、彼も黙つて相手の言葉に頷うなずいてばかりいた訳ではない。

「世と断たつのはもとより楽しかろうが、人の人たるゆえんは楽しみを全まうする所にあるのではない。区々たる一身を潔うせんとして大倫を紊みだるのは、人間の道ではない。我々として、今の世に道を行われない事ぐらいは、とつくに承知している。今の世に道を説くことの危険さも知っている。しかし、道無き世なればこそ、危険を冒おかしてもなお道を説く必要があるのではないか。」

翌朝、子路は老人の家を辞して道を急いだ。みちみち孔子と昨夜の老人とを並ならべて考えてみた。孔子の明察があおとの老人に劣る訳

はない。孔子の慾よくがあの老人よりも多い訳はない。それでいてな
 おかつ己を全うする途を棄て道のために天下を周遊していること
 を思うと、急に、昨夜は一向に感じなかつた憎悪ぞうおを、あの老人に
 対して覚え始めた。午ひる近く、ようやく、遥はるか前方の真青まっさおな麦むぎ
たけ畠の中の道に一団の人影が見えた。その中で特に際立って丈の
 高い孔子の姿を認め得た時、子路は突とつぜん然、何か胸を緊しめ付けら
 れるような苦しさを感じた。

十二

宋から陳に出る渡船の上で、子貢と宰予とが議論をしている。

「十室の邑ゆう、必ず忠信きゆう丘がごとき者あり。丘の学を好むに如しかざるなり。」という師の言葉を中心に、子貢は、この言葉にもかかわらず孔子の偉大いだいな完成はその先天的な素質の非凡ひぼんさに依よるものだといひ、宰予は、いや、後天的な自己完成への努力の方が与あずかつて大きいのだと言う。宰予によれば、孔子の能力と弟子達の能力との差異は量的なものであつて、決して質的なそれではない。孔子の有もつてゐるものは万人のもつてゐるものだ。ただその一つ一つを孔子は絶えざる刻苦によつて今の大きさにまで仕上げただけのことだと。子貢は、しかし、量的な差も絶大になると結局質的な差と変る所は無ないという。それに、自己完成への努力をあれほどまでに続け得ることそれ自体が、既に先天的な非凡さの何より

の証^{しょうこ}拠^こではないかと。だが、何にも増して孔子の天才の核^{かくしん}心^{しん}たるものは何かといえ、^{ちゆうよう}「それは」と子貢が言う。「あの優れた中^{ちゆうよう}庸^{よう}への本能だ。いついかなる場合にも夫子の進退を美しいものにする・見事な中庸への本能だ。」と。

何を言ってるんだと、傍で子路が苦い顔をする。口先ばかりで腹の無い奴等め！ 今この舟がひっくり返りでもしたら、奴等はどんなに真^{まっさお}蒼^{さう}な顔をするだろう。何といってもいったん有事の際に、実際に夫子の役に立ち得るのはおれなのだ。才弁縦横の若い二人を前にして、巧言は徳を紊るといふ言葉を考え、^{ほこ}矜^{けい}らかに我が胸中一片の氷^{ひょうしん}心^{しん}を恃^{たの}むのである。

子路にも、しかし、師への不満が必ずしも無い訳ではない。

陳の靈公が臣下の妻と通じその女の肌着を身に着けて朝ちように立ち、それを見せびらかした時、泄治せつやという臣いさが諫めて、殺された。百年ばかり以前のこの事件について一人の弟子が孔子に尋ねたことがある。泄治の正諫せいかんして殺されたのは古の名臣ひかん比干の諫死と変る所が無い。仁と称して良いであろうかと。孔子が答えた。いや、比干と紂ちゆう王との場合は血縁でもあり、また官から云つても少師であり、従つて己の身を捨てて争諫し、殺された後に紂王の悔か寤いごするのを期待した訳だ。これは仁と謂うべきであろう。泄治の靈公におけるは骨肉の親あるにも非ず、位も一大夫に過ぎぬ。君正しからず一国正しからずと知らば、潔く身を退くべきに、身の

程をも計らず、区々たる一身をもつて一国の淫婚いんこんを正そうとした。自ら無駄に生命を捐すてたものだ。仁どころの騒さわぎではないと。

その弟子はそう言われて納得して引き下つたが、傍にいた子路にはどうしても領うなずけない。早速、彼は口を出す。仁・不仁はしばらく措おく。しかしとにかく一身の危あやうきを忘れて一国の紊びんらん乱を正そうとした事の中には、智不智を超えた立派なものが在るのではなからうか。空しく命を捐つなどと言い切れないものが。たとえば結果はどうあろうとも。

「由ゆよ。汝には、そういう小義の中にある見事さばかりが眼に付いて、それ以上は判わからぬと見える。古の士は国に道あれば忠を尽くしてもつてこれを輔たすけ、国に道無ければ身を退いてもつてこれ

を避けた。こうした出処進退の見事さはいまだ判らぬと見える。

詩に曰いう。民僻よこしま多き時は自ら辟のりを立つることなかれと。蓋けだし、泄

治の場合にあてはまるようだな。」

「では」と大分長い間考えた後あとで子路が言う。結局この世で最も大切なことは、一身の安全を計ることに在るのか？ 身を捨てて

義を成すことの中にはないのであろうか？ 一人の人間の出処進

退の適不適の方が、天下蒼そうせい生の安危ということよりも大切な

であろうか？ というのは、今の泄治がもし眼前の乱倫ひんしゆに響

感くして身を退いたとすれば、なるほど彼の一身はそれで良いか

も知れぬが、陳国の民にとって一体それが何になるう？ まだし

も、無駄とは知りつつも諫死した方が、国民の気風に与える影響

から言つても遙かに意味があるのではないか。

「それは何も一身の保全ばかりが大切とは言わない。それならば比干を仁人と褒めはしないはずだ。但、ただ生命は道のために捨てるとしても捨て時・捨て処がある。それを察するに智をもつてするのは、別に私の利のためではない。急いで死ぬるばかりが能ではないのだ。」

そう言われれば一応はそんな気がして来るが、やはり釈然としない所がある。身を殺して仁を成すべきことを言いながら、その一方、どこかしら明めいてつ哲保身を最上智と考える傾向が、時々師の言説の中に感じられる。それがどうも気になるのだ。他の弟子達がこれを一向に感じないのは、明哲保身主義が彼等に本能として、

くつついているからだ。それをすべての根柢こんていとした上での・仁であり義でなければ、彼等には危くて仕方が無いに違いない。

子路が納得し難げな顔色で立去った時、その後姿を見送りながら、孔子が愀しゆうぜん然ぜんとして言った。邦くにに道有る時も直きこと矢のごとし。道無き時もまた矢のごとし。あの男も衛の史魚しぎよの類よだな。恐らく、尋じん常じょうな死に方はしないであろうと。

楚こが呉ごを伐うった時、工尹こういん商陽しょうようという者が呉の師を追うたが、同乗の王子棄疾きしつに「王事なり。子、弓を手にして可なり。」といわれて始めて弓を執り、「子、これを射よ。」と勧められてようやく一人を射斃しゃへいした。しかしすぐにまた弓かわぶくろをに収めてしまつ

た。再び促うながされてまた弓を取出し、あと二人を斃たおしたが、一人を射るごとに目を掩おおうた。さて三人を斃すと、「自分の今の身分ではこの位で充分反命するに足るだろう。」とて、車を返した。

この話を孔子が伝え聞き、「人を殺すの中、また礼あり。」と感心した。子路に言わせれば、しかし、こんなとんでもない話はない。殊に、「自分としては三人斃した位で充分だ。」などという言葉の中に、彼の大嫌いな・一身の行動を国家の休戚より上に置く考え方が余りにハッキリしているので、腹が立つのである。彼は怫然ふっぜんとして孔子に喰つて掛かる。「人臣の節、君の大事に当りては、ただ力の及ぶ所を尽くし、死して而しかうして後に已やむ。夫子何ぞ彼を善しとする？」孔子もさすがにこれには一言も無い。

笑いながら答える。「然^{しか}り。汝の言のごとし。吾^{われ}、ただその、人を殺すに忍^{しの}びざるの心あるを取るのみ。」

十三

衛に出入すること四度、陳に留まること三年、曹^{そう}・宋・蔡・葉・楚と、子路は孔子に従って歩いた。

孔子の道を実行に移してくれる諸侯が出て来ようとは、今更望めなかつたが、しかし、もはや不思議に子路はいらだたない。世の溷^{こん}濁^{たく}と諸侯の無能と孔子の不遇とに対する憤^{ふん}懣^{まん}焦^{しょう}躁^{そう}を幾年か繰^{くり}返^{かえ}した後、ようやくこの頃になって、漠然とながら、

孔子及びそれに従う自分等の運命の意味が判りかけて来たようである。それは、消極的に命なりと諦める気持とは大分遠い。同じく命なりと云うにしても、「一小国に限定されない・一時代に限られない・天下万代の木鐸ぼくたく」としての使命に目覚めかけて来た・かなり積極的な命なりである。匡きやうの地で暴民に囲まれた時昂かうぜ然んとして孔子の言った「天のいまだ斯文しぶんを喪ほろさざるや 匡きやう人ひとそれ予われをいかんせんや」が、今は子路にも実に良く解わかつて来た。いかなる場合にも絶望せず、決して現実を軽蔑せず、与えられた範囲で常に最善を尽くすという師の智慧ちえの大きさも判るし、常に後世の人に見られていることを意識しているような孔子の举措きよその意味も今にして始めて頷けるのである。あり余る俗才に妨げられ

てか、明敏子貢には、孔子のこの超時代的な使命についての自覚が少い。朴ほくちよく直子路の方が、その単純極まる師への愛情の故であらうか、かえって孔子というものの大きな意味をつかみ得たようである。

放浪の年を重ねている中に、子路ももはや五十歳であった。圭いかく角がとれたとは称し難いながら、さすがに人間の重みも加わつた。後世のいわゆる「万ばんしやう鍾我において何をか加えん」の気骨も、炯々たるその眼光も、瘦浪人やせろうにんの徒らいたずなる誇負こふから離れて、既に堂々たる一家の風格を備えて来た。

孔子が四度目に衛を訪れた時、若い衛侯や正卿 孔叔圉等から乞われるままに、子路を推してこの国に仕えさせた。孔子が十余年ぶりで故国に聘えられた時も、子路は別れて衛に留まったのである。

十年来、衛は南子夫人の乱行を中心に、絶えず紛争を重ねていた。まず 公叔戌 という者が南子排斥を企てかえつてその讒に遭つて魯に亡命する。続いて靈公の子・太子蒯聩も義母南子を刺そうとして失敗し晋に奔る。太子欠位の中に靈公が卒する。やむをえず亡命太子の子の幼い輒を立てて後を嗣がせる。出公がこれである。出奔した前太子蒯聩は晋の力を借りて衛

の西部に潜せん入にゆうし虎視眈々こしたんたんと衛侯の位を窺う。これを拒こもうとする現衛侯出公は子。位を奪うばおうと狙ねらう者は父。子路が仕えることになった衛の国はこのような状態であつた。

子路の仕事は孔家こうけのために宰として蒲ほの地を治めることである。衛の孔家は、魯ならば季孫氏に当る名家で、当主孔叔圉はつとに名大夫の誉ほまれが高い。蒲は、先頃南子の讒に遭つて亡命した公叔成の旧領地で、従つて、主人を逐おうた現在の政府に対してことごとくに反抗的な態度を執っている。元々じんぎ人氣あの荒い土地で、かつて子路自身も孔子に従つてこの地で暴民に襲われたことがある。

任地に立つ前、子路は孔子の所に行き、「邑に壯士多くして治め難し」といわれる蒲の事情を述べて教を乞こうた。孔子が言う。

「恭きようにして敬けいあらばもつて勇ゆうを懼おそれしむべく、寛かんにして正ただしからばもつて強きやうを懷なつくべく、温ぬるにして断つならばもつて姦おとこを抑おさうべし」と。子路再拜して謝し、欣きん然ぜんとして任おんに赴むいた。

蒲はに着くと子路はまず土地の有力者、反抗分子等呼び、これと腹藏なく語り合つた。手なづけようとの手段ではない。孔子の常に言う「教えずして刑けいすることの不可」を知るが故に、まず彼等に己の意の在る所を明かしたのである。気取の無い率直さが荒つぽい土地の人氣に投じたらしい。壮士連はことごとく子路の明快闊達に推服した。それにこの頃になると、既に子路の名は孔門くわんもん随ずい一いちの快男児として天下に響ひびいていた。「片言もつて獄ごくを折さだむべきものは、それ由ゆか」などという孔子の推すい奨しょうの辞までが、

大袈裟な尾鰭おおげさ おひれをつけて普あまねく知れ渡わたっていたのである。蒲の壮士連を推服せしめたものは、一つには確かにこうした評判でもあつた。

三年後、孔子がたまたま蒲を通つた。まず領内に入った時、

「善い哉、由や、恭敬にして信なり」と言つた。進んで邑に入つた時、「善い哉、由や、忠信にして寛なり」と言つた。いよいよ

子路の邸に入るに及んで、「善い哉、由や、明察にして断なり」

と言つた。轡くつわを執つていた子貢が、いまだ子路を見ずしてこれを

褒める理由を聞くと、孔子が答えた。已すにその領域に入れば田でんち

疇ゆう ことごとく治まり草そうらい菜甚だ辟ひらけ溝こうきよく 洫は深く整つている。

治者恭敬にして信なるが故に、民その力を尽くしたからである。

その邑に入れば民家の 牆しよう 屋おく は完備し樹木は繁茂はんもしている。治者忠信にして寛なるが故に、民その營ゆるがを忽せにしないからである。さていよいよその庭に至れば甚だ清閑せいかんで従者僕僮ぼくどう一人として命めいに違たがう者が無い。治者の言、明察にして断なるが故に、その政みだが紊みだれないからである。いまだ由を見ずしてことごとくその政を知つた訳ではないかと。

十五

魯の哀公あいこうが西の方大野かたたいやに狩かりして麒麟きりんを獲えた頃、子路は一時衛から魯に帰っていた。その時小しょうちゆの大夫・射えきという者が国に

叛そむき魯に來奔した。子路と一面識のあつたこの男は、「季路をして我に要せしめば、吾盟ちかうことなけん。」と言つた。当時の慣ならいとして、他国に亡命した者は、その生命の保証をその国に盟つてもらつてから始めて安んじて居つくことが出来るのだが、この小の大夫は「子路さえその保証に立つてくれれば魯国の誓ちかいなど要らぬ」というのである。諾たくを宿するなし、という子路の信と直とは、それほど世に知られていたのだ。ところが、子路はこの頼にべも無く断ことわつた。ある人が言う。千乗の国の盟をも信ぜずして、ただ子一人の言を信じようという。男児の本懐ほんかいこれに過ぎたるはあるまいに、なにゆえこれを恥とするのかと。子路が答えた。魯国が小と事ある場合、その城下に死ねとあらば、事のいかん

を問わず欣んで応じよう。しかし射という男は国を売った不臣だ。もしその保証に立つとなれば、自ら売国奴ばいこくどを是認することになる。おれに出来ることか、出来ないことか、考えるまでもないではないか！

子路を良く知るほどの者は、この話を伝え聞いた時、思わず微笑した。余りにも彼のしそうな事、言いそうな事だったからである。

同じ年、齊の陳恒ちんこうがその君を弑しいした。孔子は齋戒さいかいすること三日の後、哀公の前に出て、義のために齊を伐うたんことを請うた。請うこと三度。齊の強さを恐れた哀公は聴こうとしない。季孫きそんに

告げて事を計れと言う。季康子きこうしがこれに賛成する訳が無いのだ。孔子は君の前を退いて、さて人に告げて言った。「吾、大夫の後しりえに従うをもつてなり。故にあえて言わずんばあらず。」無駄とは知りつつも一応は言わねばならぬ己おのれの地位だというのである。

(当時孔子は国老の待たい遇ぐうを受けていた。)

子路はちよつと顔を曇くもらせた。夫子のした事は、ただ形まを完とするのために過ぎなかつたのか。形さえ履ふめば、それが実行に移されないでも平気で済ませる程度の義憤なのか？

教を受けること四十年に近くして、なお、この溝みぞはどうしようもないのである。

子路が魯に来てゐる間に、衛では政界の大黒柱こうしゆくぎよ孔叔圉が死んだ。その未亡人で、亡命太子蒯聩かいがいの姉に当る伯姫はくきという女策士が政治の表面に出て来る。一子かいが父圉ぎよの後を嗣あといだことにはなつてゐるが、名目だけに過ぎぬ。伯姫から云えば、現衛侯輒ちやうは甥おい、位を窺う前太子は弟で、親しさに変りはないはずだが、愛あいぞ憎うと利慾との複雑な経緯けいゐがあつて、妙に弟のためばかりを計ろうとする。夫の死後頻しきりに寵ちやう愛あいしている小姓上りの渾良こんりよ夫うふなる美青年を使として、弟蒯聩との間を往復させ、秘かに現衛侯逐出おいだしを企んでゐる。

子路が再び衛に戻もどつてみると、衛侯父子の争は更に激化げきかし、政変の機運の濃こく漂ただよっているのがどことなく感じられた。

周の昭王の四十年閏十二月某日うろつ ぼうじつ。夕方近くになつて子路の家にあわただしく跳び込んで来た使があつた。孔家の老・欒寧らんねいの所からである。「本日、前太子蒯聵都に潜入。ただ今孔氏の宅に入り、伯姫・渾良夫と共に当主孔こうかいを脅おどして己を衛侯に戴かした。大勢は既に動かし難い。自分（欒寧）は今から現衛侯を奉ほうじて魯に奔るところだ。後はよろしく頼む。」という口上である。いよいよ来たな、と子路は思った。とにかく、自分の直接の主

人に当る孔が捕えられ脅されたと聞いては、黙っている訳に行かない。おつ取り刃で、彼は公宮へ駈け付ける。

外門を入ろうとすると、ちようど中から出て来るちんちくりんな男にぶつつかつた。子羔だ。孔門の後輩で、子路の推薦によつてこの国の大夫となつた。正直な・気の小さい男である。子羔が言う。内門はもう閉つてしまいましたよ。子路。いや、とにかく行くだけは行つてみよう。子羔。しかし、もう無駄ですよ。かえつて難に遭うこともないとは限らぬし。子路が声を荒らげて言う。孔家の禄を喰む身ではないか。何のために難を避ける？

子羔を振切つて内門の所まで来ると、果して中から閉つている。ドンドンと烈しく叩く。はいつてはいけない！ と、中から叫ぶ。

その声を聞き咎めて子路が怒鳴った。公孫敢だな、その声は。難を逃れんがために節を変ずるような、俺は、そんな人間じゃない。その禄を利した以上、その患を救わねばならぬのだ。開けろ！ 開けろ！

ちようど中から使の者が出て来たので、それと入違いに子路は跳び込んだ。

見ると、広庭一面の群集だ。孔の名において新衛侯擁立の宣言があるからとて急に呼び集められた群臣である。皆それぞれに驚愕と困惑との表情を浮かべ、向背に迷うもののごとく見える。庭に面した露台の上には、若い孔が母の伯姫と叔父の蒯聩とに抑えられ、一同に向つて政變の宣言とその説明とをす

るよう、強^しいられている貌^{かたち}だ。

子路は群衆の背後^{うしろ}から露台に向つて大声に叫んだ。孔を捕えて何になるか！ 孔を離せ。孔一人を殺したとて正義派は亡^{ほろ}びはせぬぞ！

子路としてはまず己の主人を救い出したかつたのだ。さて、広庭のざわめきが一瞬静まつて一同が己の方を振向いたと知ると、今度は群集に向つて煽^{せんどう}動を始めた。太子は音に聞えた臆^{おくび}病^{ようも}者^のだぞ。下から火を放つて台を焼けば、恐れて孔叔（）を舍^{ゆる}すに決っている。火を放^つけようではないか。火を！

既に薄暮^{はくぼ}のこととて庭の隅^{すみ}々^{ずみ}に篝^{かがりび}火が燃されている。それを指さしながら子路が、「火を！ 火を！」と叫ぶ。「先代孔叔

文子（園）の恩義に感ずる者共は火を取って台を焼け。そうして孔叔を救え！」

台の上の篡奪者は大いに懼れ、石乞・孟鷹の二剣士に命じて、子路を討たしめた。

子路は二人を相手に激しく斬り結ぶ。往年の勇者子路も、しかし、年には勝てぬ。次第に疲労が加わり、呼吸が乱れる。子路の旗色の悪いのを見た群集は、この時ようやく旗幟を明らかにした。罵声が子路に向つて飛び、無数の石や棒が子路の身体に当つた。敵の戟の尖端が頬を掠めた。纓（冠の紐）が断れて、冠が落ちかかる。左手でそれを支えようとした途端に、もう一人の敵の剣が肩先に喰い込む。血が迸り、子路は倒れ、冠が落ちる。倒れなが

ら、子路は手を伸ばして冠を拾い、正しく頭に着けて素速く纓を結んだ。敵の刃の下で、真赤に血を浴びた子路が、最期の力を絞つて絶叫する。

「見よ！ 君子は、冠を、正しゆうして、死ぬものだぞ！」

全身膾のごとくに切り刻まれて、子路は死んだ。

魯に在つて遥かに衛の政変を聞いた孔子は即座に、「柴（子羔）や、それ帰らん。由や死なん。」と言つた。果してその言のごとくになったことを知つた時、老聖人は佇立瞑目することしばし、やがて澹然として涙下つた。子路の屍が醢にされたと聞くや、

家中の塩漬類しおづけるいをことごとく捨てさせ、爾後じご、醃しよくは一切ぜん食膳しよくぜんに上さなかつたということである。

(昭和十八年二月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」筑摩書房

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

入力：大内章

校正：川向直樹

2004年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

弟子

中島敦

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>